

# 配慮のための言語形式選択基準にみる男女差

— 自己と集団の関係性の捉え方を中心に —

横倉 真弥

## 要旨

職場と友人関係という異なる人間関係場面で、上位者の立場にある場合に行われる配慮のための言語形式選択における男女差を、敬体と授受形式の使用傾向を指標にして考察した。その結果、男性は二つの場面のどちらにおいても上位者としての自己優越性を基準にしてほぼ同一の言語形式を選択しているが、女性では、ほぼ半数が職場の人間関係に社会的・心理的距離を感じており、友人関係場面と職場場面では言語形式選択の基準が異なることが判明した。こうした選択基準に関わる差異は質的差異と呼べよう。その根底には、男性では役割・タスクが個人単位で評価される価値基準、女性では「他者とともにある自己」という価値基準に基づく自己と集団との関係性の捉え方の差異が存在する。女性の職場の捉え方には、多くの女性が職場では「他者とともにある自己」を実現しにくいと感じていることが作用していると考えられる。

## キーワード

言語形式選択基準、授受形式、敬体、人間関係の捉え方、ポライトネス

## 1. はじめに

これまで多くの研究において、どのような言語においても、総じて男性よりも女性の方が「丁寧」な話し方をしており、そこには社会が女性に期待・要求している柔らかく控えめという「女性像」が存在すると指摘されてきた。そして女性に対して、このような言葉の「使用原則」や「女性像」からの逸脱の許容度が低いこともまた指摘されてきた。一方で日常生活では、他者へ

の配慮を表す場合は、慣用化されている言語形式を使うことも多いとはいえ、男女ともに人間関係や状況に応じて言語形式を選択し、複合させて、主体的に言語行為を行ってもいるといえよう。もちろん、配慮のための言語形式選択においても「女言葉」は存在しているが、「丁寧に」という印象につながる言語形式は多様であり、その中から特定の言語形式を選択することによって、自己の意思や感情等を表現していることは男性も女性も同様である。したがって、宇佐美 (2006) が指摘するように、対人コミュニケーションの中で生じている質的な男女差を言語形式選択の次元においても実証的に検証していくことが必要となろう。

そこで本稿では、職場と友人関係という「上下関係」と「社会的・心理的距離」の点で対照的な人間関係において、配慮のための言語形式とその組み合わせの選択基準に対して、男女では自己とこれらの集団の位置づけ、関係性の捉え方の差異がどのような影響を及ぼしているのかについて考察を進めていきたい。

## 2. 言語形式とポライトネス

人は、1 発話を構成する様々な言語形式が表示するネガティブポライトネスとポジティブポライトネス (Brown & Levinson 1978) を相互に関連させて、対人距離を調整し、配慮を表している。たとえば、①「その資料、次の会議に持ってきてもらえる？」という発話なら、授受形式や可能形を用い、疑問を表すために「か」という終助詞ではなく、音声を使っている。また、②「次の会議に持ってくるようお願い。」という発話なら、疑問ではなく、言い切りで終わらせ、お願いするという遂行動詞を使っているため、同じ場面での発話だとしても、①と②とでは、ずいぶん印象が異なることがわかる。

町田 (2011) は「発信者が自己を取り巻く世界に関して注目している運動や状態」(p.13) を「現象」とし、その「言語化された結果の現象を「事態」」(p.15) と呼んでいる。この「事態」の中には、話し手の聞き手に対する働きかけや願望・意思、さらに話し手と聞き手の対人距離 (関係性) を考慮した配慮などが含まれているだろう。そして、この言語化にあたって選択した言

語形式とその組み合わせが、文で表される総体としての対人距離に変換されることで、発話に対する聞き手の印象も異なってくるのだと考えられる。

本稿では、対人距離を表す配慮のための言語形式選択の基準に男女差はみられるのか、そして男性と女性とでは自己と集団との関係性の捉え方に違いがみられるとすれば、その違いが選択基準にどのように影響しているのか、を考察する<sup>1)</sup>。考察にあたって敬体と授受形式（テヤル・テモラウ・テクレル）を指標にして、職場と友人関係において、話し手としての回答者が上司またはリーダーという上位の立場で、指示・命令を出す場合のその使用の有無を筆者の行った調査に基づいて進めることにしたい。ここで、敬体と授受形式を指標としたのは、ともに対人距離を表現する言語形式であり、話し手（自己）と聞き手（相手）との関係性の捉え方と言語形式選択基準との関係を観察しやすいからである。また回答者に「上位者」の立場での回答を求めたのは、もともと成員間の上下関係と社会的・心理的距離の点で対照的な性格を持つと考えられる対人関係において、上位者の立場が配慮のための言語形式の選択基準を前景化させやすいと考えたからである。そして、指示・命令の内容に聞き手にとっての負荷（ある文化におけるある行為の負荷度のことで、ポライトネス理論でいうR値、以下Rと記す）の異なる場面を設定して、上位者がその違いを考慮したうえで、聞き手との関係性をどのように捉えて発話するのかを敬体と授受形式の使用を通じて明らかにしたい。

以上の考察目的を踏まえて、調査で回答者に示した設定場面と設問を摘記して示すと次のとおりである。

人間関係1（職場における上下関係）では、「上司が部下Aに机の上にある資料を5分後に始まる社内会議（Aも参加します）に持ってくるように言います。」という負荷度の低い場面（以下R<sup>-</sup>と記す）と、「退社時間が間近ですが、上司が部下Aに、残業して明日までに資料を作成するように言います。」という負荷度の高い場面（以下R<sup>+</sup>と記す）を設定した。人間関係2（友人関係）では、友人同士で地域の祭りに模擬店を出すことになり、その後片付けの際に「友人の中から選ばれたリーダーが、Aさん（Aも模擬店を出した友人の一人）に、ごみ袋（Aの近くにある）を持ってくるように言います。」というR<sup>-</sup>の場面と、同じく模擬店を出すにあたり、「リーダーがAさんに明

日までに品物の受注を業者に確認するように言います。」という R<sup>+</sup>の場面を設定した。そして「もしあなたが上司（またはリーダー）だとしたら、どのように言いますか。」という設問に対し、質問紙を用いて、それぞれ自由回答を求めた。

調査（2013年6月実施）は、東京・神奈川在住、在勤の20代から60代の日本語母語話者の男女、各年代13名ずつ、計130名を対象に、以上の場面設定と設問、自由に記入できる回答欄を含む調査紙を対象者のもとの留め置き、配布後2週間以内に回収して行った。このうち、本稿で使用する自由回答をした被調査者（以下、回答者と表記する）は、男性53名、女性58名である。回答者の年齢別内訳は、男性では20代22.6%、30代22.6%、40代24.5%、50代17.9%、60代13.2%であり、女性ではそれぞれ、22.4%、20.7%、22.4%、17.2%、17.2%である。また、男女の職業別内訳は表1にみられるとおりである。表中の製造・運輸・建設（以下、職業（1）と記す）、卸・小売り・サービス（以下、職業（2）と記す）、金融・教育・公務（以下、職業（3）と記す）の職についている者が職場の一員として現役で働いているとすれば、それに該当するのは男性の回答者では約60%、女性では約33%である。女性で一番多いのが主婦約45%である。主婦のうち半数が「パート・アルバイトあり」と回答しているが、いずれにしても女性を対象とした考察では主婦の比重を無視できないだろう。こうした点も考慮して、主婦の分も含めた回答文を示しながら、以下考察を進める。

表1 回答者の男女・職業別構成比 (%) \* 調査紙の回答から筆者が作成した。

	(1) 製造・運輸・建設	(2) 卸・小売・サービス	(3) 金融・教育・公務	(4) 自営業	(5) 学生	(6) 主婦	(7) 無職	(8) その他
男性	3.8	26.4	30.2	17.0	11.3	—	7.5	3.8
女性	3.4	13.8	15.5	3.4	6.9	44.8	1.7	10.3

### 3. 敬体と授受形式使用上の男女差

初めに、職場と友人関係の各場面の敬体と授受形式の男女別使用率を表2に示しておきたい。表の1R<sup>-</sup>は、人間関係1（職場関係）におけるR値の低

い場面、 $1R^+$ は人間関係1のR値が高い場面を、 $2R^-$ 、 $2R^+$ は人間関係2（友人関係）におけるR値の低い場面、高い場面をそれぞれ表す。そして使用率はそれぞれの場面で、回答者が上司やリーダーの立場に置かれた場合を想定した回答での敬体と授受形式の使用者の割合を示す。

表2 敬体と授受形式の男女別使用率（%）

	敬体		授受形式	
	男	女	男	女
$1R^-$	30.8	46.0	65.4	54.0
$1R^+$	24.1	29.9	72.4	55.2
$2R^-$	21.6	25.5	76.5	74.5
$2R^+$	40.4	30.2	75.4	68.3

\*横倉（2019）表5より引用した。

### 3.1 敬体使用にみる男女差

敬体使用は相手との社会的・心理的距離を維持、あるいは遠ざけることによって、「丁寧さ」あるいは「よそよそしさ」を表示する。これに対して、敬体不使用は相手との距離を縮めることで「親しみ」、あるいは逆に自己の優位性を表示する。使用する方（不使用を含む）も聞き手も、そのどちらを意図あるいは解釈するかは、人間関係の種類や継続性、そこでの上下関係そして状況によるであろう。

表2からは、男性は職場での上下関係（人間関係1）においては、敬体使用率がR値の高低にかかわらず低くほぼ一定であり、男性が職場において上位者である場合、敬体不使用が人間関係を表示する表現方法として確立していることがうかがえる。これに対して、友人関係を基盤とする人間関係2では、R値が上昇すると男性の敬体使用は40%と、低い場合と比べておよそ2倍になっており、少なからぬ男性が使用していることがわかる。

敬体の親疎関係表示を考慮すると、指示・命令の遂行時の男性の場合、「役割」に基づく自らの優位性表示と強い関係があると考えられる。職場には上下関係があり、上位者は下位者に対して職務上の自己優位性を示すことができるからである。男性の場合は指示・命令の内容にかかわらず、回答例①②のように敬体不使用によって（①の場合は命令形も使用することによって）、この上位者としての自らの優位性を表示することで職場の人間関係を管理し、指示・命令の実行性を高めようとする傾向があるといえよう。

- ① 1R<sup>-</sup>「その資料、次の会議で必要だから必ずもってこいよ。」(30代、男性、職業(3))
- ② 1R<sup>+</sup>「この資料、明日までに仕上げてくれないか。」(50代、男性、職業(1))

一方、友人関係では、③④のように一時的にせよ役割の上で上下関係が生じると捉え、本来の対等関係を考慮して、「指示・命令」する役割に基づく自らの優位性を相殺する形で、聞き手に敬体を使用していると考えられる。

- ③ 2R<sup>+</sup>「明日までに業者さんに品物の受注を確認してください。」(50代、男性、職業(3))
- ④ 2R<sup>+</sup>「確認をお願いします。」(40代、男性、職業(2))

しかし③④の場合も、ある種の「よそよそしさ」も残り、「丁寧さ」と「よそよそしさ」を同時に表示することで、自己の優位性をそれとなく示しているともいえよう。もちろん、友人関係における男性の敬体不使用のすべてが、「役割」と結びついているわけではなく、友人関係における話し言葉の基調として敬体不使用が選ばれているが、なんらかのポライトネスストラテジーとして敬体(不)使用が選ばれるときには、相手との関係性は「役割」の観念に基づく上下関係の捉え方と結びつきやすいと考えられる。

一方、女性は人間関係1でR値が低い場合は、敬体使用率が46%と男性に比べても高く、およそ半数が敬体を使用しているが、R値の上昇により、その使用率が男性の水準近くまで下がる。この敬体不使用のストラテジー的な意味合いは、男性のように上位者としての「役割」と連動し、指示・命令の実行性を高めようとしている可能性があるだろう。しかも、R値の高い場面では、⑤のように、イメージの中の上司(おそらく男性)の言葉を回答していると考えられる例が多くなる。1R<sup>+</sup>で、このような例がみられる全回答者の職業別内訳は、主婦37.5%、現役雇用者層30%、それ以外が32.5%である。これらの例が1R<sup>+</sup>の場面での女性の敬体使用率に影響を与えている可能性もあり、それが何を示しているのかが問題となろう。

- ⑤ 1R<sup>+</sup>「この資料、明日までに仕上げなければいけないんだが、できそうか？」(20代、女性、職業(3))

しかしながら、R値が低い場合の女性の敬体使用率の高さについては、「役

割」に基づく自己の優位性を強調しない、いわゆる「女性像」に沿った言葉遣いなのか、職場での人間関係においては、そもそも対人距離をとっておきたいということの表れなのか、様々な面から考察が可能である。

これに対して人間関係2では、 $R^-$ 、 $R^+$ ともに、女性の敬体使用率は低く保たれている。このように女性の場合、一貫して敬体不使用の傾向がみられるとともに、相手に拒否の余地がないことを示す命令形を使うのではなく、

- ⑥  $2R^+$ 「明日までに業者に品物の受注を確認しないといけないんだけど、お願いしていい？」（40代、女性、主婦）
- ⑦  $2R^+$ 「明日までに業者に品物の受注お願いできる？」（20代、女性、職業（3））

のように、許可求め表現や、可能かどうか問うなど、相手の負担感を軽減する表現が多い。このことを考慮すれば、この場面での敬体不使用は、対等な関係での親しみ表示として機能しており、一時的な役割が付与されても、その役割やそれに基づく自己の優位性よりも、本来の友人関係のほうが優先されていると考えられる。こうした友人関係における女性の敬体（不）使用の傾向は、職場における敬体（不）使用の傾向とも、また男性の職場や友人関係における上位者としての自己の優位性表示とも、異なる特徴を示しているといえる。

### 3.2 授受形式使用にみる男女差

次に授受形式の使用傾向の男女差についてみてみよう。

授受形式は親近感表示によって相手との社会的・心理的距離を縮めて、言語上、内集団関係や集団的一体感を発生させる（横倉 2012）。すなわち、授受形式は上下関係の下でも言語上「～テヤル」「～テクレル」「～テモラウ」という贈与交換関係を作り出し、集団成員間に親近感・一体感をもたらす。このように、授受形式はポジティブポライトネス機能によって、上下関係と親近感を両立させる働きをする。職場の人間関係であれ、友人関係であれ、それらが多様な意見や感情等を持つ人間の集合体であることから、その成員間の親近感や帰属意識は集団としてのまとまりや運営上必要不可欠であろう（三溝 1986）。授受形式はこうした集団的一体感をもたらす。

表2から、男性では人間関係1、2を問わず一貫して授受形式の使用率が高いのに対し、女性は人間関係1と2とでは、前者で50%台半ば、後者で70%前後と使用率が大きく異なることがわかる。授受形式は、「～シテクダサイ」「～シテモラエマセンカ」等、場面上、使用が予想される文型にもともと組み込まれているため、これらの典型表現を用いていけば、授受形式の使用率が高くなることが予測される。すなわち、男性は人間関係を問わず、当該場面においては⑧⑨のような授受形式が組み込まれた典型表現の使用率が高く、したがって授受形式の使用率も高くなるが、女性は職場と友人関係を区別して、典型表現とそうでない表現を使い分けていたことになる。しかも、女性の職場での授受形式の使用率はR値の高低にかかわらずほぼ一定している。

- ⑧ 1R<sup>+</sup>「この資料、明日までに仕上げてくださいませんか。」(40代、男性、職業(2))
- ⑨ 2R<sup>+</sup>「明日までに、業者に品物の受注を確認してもらえるかな?」(30代、男性、職業(3))

女性の場合、授受形式の持つポライトネス機能を友人関係で利用していることは明らかであろう。女性は、⑩⑪のように、友人関係においては負担感の軽減を示す言語形式を選択した上に、それに重ねるように授受形式の使用による集団の一体感と親しみを表示する。

- ⑩ 2R<sup>-</sup>「そのごみ袋持ってきてくれる?」(40代、女性、職業(2))
- ⑪ 2R<sup>+</sup>「明日までに業者に品物の受注を確認してもらいたいんだけど、お願いできる?」(40代、女性、職業(1))

しかしながら、職場における人間関係では授受形式の使用は半数程度にとどまり、しかもR値の高い場面では、先に敬体不使用の例で示したが、⑫⑬⑭⑮のように、イメージの中の上司(おそらく男性)の言葉を回答していると考えられる例が多くなる。

- ⑫ 1R<sup>+</sup>「この資料、明日までにどうしても仕上げなくてはならない。申し訳ないが協力してくださいませんか。」(20代、女性、職業(3))
- ⑬ 1R<sup>+</sup>「明日までにこの資料が必要なので、今日中に仕上げてくださいませんか。」(50代、女性、主婦)
- ⑭ 1R<sup>+</sup>「退社間際で申し訳ないが、明日までにどうしても必要なので、

残業して資料を仕上げしてほしい。」(40代、女性、その他)

- ⑮ 1R<sup>+</sup>「この資料、明日までに仕上げたいんだけど、今日残業お願いできるかい？」(30代、女性、職業(1))

⑫⑬は授受形式が含まれる「～シテクレナイカ」を使用しており、このような回答例は男性に多くみられるものであった。しかしながら、女性の場合、⑭⑮のようにイメージの中の上司と思われる回答の中でも授受形式を使用していないものも多くみられる。このことは、少なからぬ女性が、授受形式の使用の有無にかかわらず、1R<sup>+</sup>の場面では、男性上司が使う言葉が初めに浮かぶことを表している。そして、この事実は、表現された言語形式と自身の気持ち、心理との間には距離があることを示しており、⑯⑰のように友人関係において自身の言葉で表現しているのとは対照的である。

- ⑯ 2R<sup>+</sup>「明日までに業者に品物の受注を確認してね。」(40代、女性、主婦)

- ⑰ 2R<sup>+</sup>「確認してもらえる？」(30代、女性、職業(3))

このような女性の職場と友人関係を区別した言語形式選択は、男性が職場、友人関係を問わず、授受形式を使って社会的・心理的距離を縮めて、指示・命令の実行性を保証しようとしている点、あるいはその有効性を感じている点とは異なるといえよう。

### 3.3 人間関係の捉え方の男女の質的差異

以上の上位者の立場に立った職場と友人関係における敬体と授受形式の使用傾向を通じて、男女間にその選択基準と使用上に質的と呼べる差異は存在するのか、またその差異は自己と集団の関係性の捉え方とどのように関連しているのかが問題となろう。

男性ではすでに述べたように、職場においても、一時的とはいえ上下関係が生じて変化した友人関係においても、ほぼ一貫した配慮のための言語形式の選択・使用がなされているが、そこには上位者としての自己の優位性が選択基準として存在しているといえよう。そしてこの選択基準は、自己と集団との関係性の捉え方と密接に結びついているとみられる。富永(1995)によれば、近代社会の特徴の一つといわれている業績主義(能力主義)的価値基

準によって個人が評価されることから、この評価のもとになる自己の役割・タスクの達成が目的となり、人間関係・集団はその手段とみなされやすい。こうした自己と集団との関係性の捉え方は、もともと自己中心である上に、職務権限の裏付けもあって、上位者の場合、それが自己の優位性として表れやすいといえよう。それゆえ、男性では職場においては上下関係に基づく自己の優位性を言語形式選択の基準にしており、一時的とはいえ上下関係が生じて変化した友人関係においてもそれが意識されているといえよう。職場における一貫した敬体不使用、逆に変化した友人関係においては、少なからぬ男性が優位性を相殺する形で、下位者に対して敬体を使用する点に、それが表れている。

しかも、この価値基準は男性の場合、上位者にも下位者にも共有されており、その面では集団の構成員間の社会的・心理的距離は近いといえよう。そして授受形式の使用も、こうした価値基準の共有を前提にして、多くは慣用化された語句を使用しているとはいえ、下位者との距離を縮めるポライトネス効果を踏まえうたえで使用していると思われる。こうした上位者としての自己の優位性という基準が、男性に職場と友人関係を通じてほぼ均一した配慮のための言語形式を選択、使用させる理由となっているのだと考えられる。

女性の場合、友人関係にあるタスクの遂行が加わるとしても、個人単位のタスク・役割よりも所属する集団や人間関係の関係性の維持に主たる関心・目的があり、配慮のための言語形式選択の基準もそこにあるといえる。そして、その根底には「他者とともにある自己」(坂田 2014) という自己と集団との関係性の捉え方が存在しており、それは男性とは質的に異なる捉え方である。

しかしながら、女性の職場の人間関係に対する言語形式選択の基準はこれとは異なり、複雑である。一面では敬体不使用にみられるように上位者としての自己の優位性を示しながら、あるいは下位者との距離の近さを示しながら、他方では半数の女性たちが集団の一体感を高める授受形式の使用を選択していない。しかも敬体不使用の場合でも、また授受形式使用の有無の双方の場合でも、少なからぬ女性が男性上司を思わせる言語形式を使用している。このような回答は、上司ならばこのように回答すべきであるという、一種の

「役割語」のようなものとして回答された可能性があるが、それが男性上司の「役割語」を使用している点が注目されよう。もちろん、男性回答者の中でも「役割語」を使用している例も多いであろう。しかしながら男性の場合、男性が多数で、上司を男性が大多数を占めているような職場では、「役割語」は慣習化・伝承化されて一定の規範性を持つものに対して、女性の場合はある程度の負荷のある指示・命令の経験がない（あるいは少ない）ことや、ロール・モデルとなる女性上司の数が現時点で少ないことから、女性上司の言葉（イメージの中の）も思い浮かばないのだと考えられる<sup>2)</sup>。このように男性上司の「役割語」の模倣と、友人関係にみられる「他者とともにある自己」という関係性の捉え方の間には距離がみられ、その距離が職場の人間関係における敬体と授受形式の使用傾向に表れているといえよう。

#### 4. 結論

自己と集団との関係性を表示する敬体と授受形式の使用傾向を指標にして、職場と友人という人間関係場面において、配慮のための言語形式選択の男女差について考察してきた。男性が職場と、あるタスクを課された友人関係という人間関係の二つの場面で、上位者としての自己優位性を基準にしてほぼ同一の言語形式を選択して配慮を表しているのに対して、女性は友人関係では自己の優位性よりも本来の集団の維持を基準にしている一方で、職場では、およそ半数の女性がそこでの人間関係に対して社会的・心理的距離を感じており、それゆえ、二つの人間関係を区別して、それに応じた言語形式を選択して配慮を表している。そしてこの言語形式選択・使用の男女差はそれが選択基準にかかわることから、質的に異なると指摘できる。こうした選択基準の根底には男性では役割・タスクの遂行が個人単位で評価される価値基準、女性では「他者とともにある自己」という価値基準にみられる自己と集団の関係性の捉え方の質的差異があると考えられる。

#### 【注】

1) 横倉（2016）（2019）において、筆者は、配慮表現に影響を及ぼす「P値（上下関係）、

D 値 (社会的距離)、R 値 (ある文化におけるある行為の負荷度) (Brown & Levinson 1978) のうち、R 値の及ぼす影響について、本稿でも引用・使用する調査結果を用いて敬体と授受形式を含む13の言語形式の全体的な使用傾向とその男女差を考察した。本稿では上記論文の内容を踏まえ、配慮のための言語形式選択の根底にある選択基準の男女差の問題として設定しなおし、その基準に対して自己と集団との関係性の捉え方の男女間の差異がどのような影響を及ぼしているかという視点から考察するものである。したがって、本稿においてこれらの論文のデータを引用し使用しているが、以上の問題設定と視点から考察していること、またそれらからの援用を予めお断りしておきたい。

- 2) 坂田 (2014) によれば、女性は男性と比べて、他者や社会への志向性が高く、相互依存的・関係的な自己概念を持つことが多くの研究によって指摘されている。そして、男性が支配的な職場 (管理職やSTEM) を女性が避ける要因を、そこでは女性が少数者であることそのものであるとしている。すなわち、「他者とともにある自己」を実現しにくい状況にあることそのものが問題であることを指摘している。

## [参考文献]

- Brown & Levinson (1978 (1987)) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: New York: Cambridge University Press.
- 町田健 (2011) 『言語構造基礎論——文の意味と構造——』勁草書房。
- 三溝信 (1986) 『社会学講義』有信堂。
- 坂田桐子 (2014) 「選好や行動の男女差はどのように生じるか——性別職域分離を説明する社会心理学の視点」『日本労働研究雑誌』No.648, 94-104.
- 富永健一 (1995) 『社会学講義』中公新書。
- 宇佐美まゆみ (2006) 「ジェンダーとポライトネス——女性は男性よりポライトなのか?——」日本ジェンダー学会編『日本語とジェンダー』ひつじ書房, 21-37.
- 横倉真弥 (2012) 「授受形式によるポライトネス上の距離の質的転換——贈与交換システムから見た人間関係の距離の維持と親近感表示の両立——」『名古屋言語研究』第6号, 81-94.
- 横倉真弥 (2016) 「R 値が及ぼす配慮を目的とした言語形式選択への影響について」『名古屋言語研究』第10号, 71-84.
- 横倉真弥 (2019) 「配慮のための言語形式選択にみられる男女差について——指示・命令遂行時を例に——」『名古屋言語研究』第13号, 45-58.

(よこくら まなみ・岐阜協立大学准教授)